

各関係機関団体の  
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予報第5号(8月)について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

予報第5号

イネカメムシの発生状況に注意!

本年は、昨年につき、斑点米カメムシ類の一種であるイネカメムシの成虫が現地ほ場で確認されており、発生が広がっています。また、予察灯には昨年同様に多数誘殺されています。

出穂直後に加害されると不稔となり、穂揃期以降に加害されると斑点米が生じます。本種に対しては、ほ場の発生状況を確認しながら、出穂期に防除を実施しましょう。また、発生状況に応じて補正防除を行いましょう(詳細は、令和6年度病虫害発生予察技術情報第8号を参照)。



図1 ほ場でのイネカメムシ成虫



図2 イネカメムシ幼虫・成虫

8月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	8月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲 (普通期)	いもち病	やや少	やや少	やや少
	紋枯病	—	並	並
	セジロウンカ	やや少	やや少	並
	トビイロウンカ	やや少	やや少	並
	コブノメイガ	並	やや多	やや少
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや多	並
かんきつ	黒点病	並	並	並
	ミカンハダニ	多	多	多
なし	黒星病	やや多	やや多	やや少
	ナシヒメシンクイ	並	並	並
	ハダニ類	やや多	やや多	多
かき	炭疽病	並	並	並
	フジコナカイガラムシ	少	少	並
	ハマキムシ類	やや多	やや多	やや多
	カキノヘタムシガ	並	並	並
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	多 <sup>3)</sup>	— <sup>3)</sup>	多 <sup>3)</sup>
イチゴ (育苗期)	炭疽病	やや多	多	並
	ハダニ類	やや少	並	並
野菜共通	コナジラミ類 <sup>4)</sup>	やや少	並	並
茶	炭疽病	やや多	やや多	並
	カンザワハダニ	やや多	やや多	やや多
	チャノコカクモンハマキ	やや多	やや多	並
	チャノホソガ	少	並	並
	チャノキイロアザミウマ	並	並	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	並	並
	チャトゲコナジラミ	並	並	並

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。  
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は年次間変動が大きいので、前年比としています。

注4) 野菜共通・コナジラミ類は、2018年から調査を実施しているため、平年は過去6年間としています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。  
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス  
URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



○X (旧 Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせをしています。  
Xの本アカウント (福岡県農作物病害虫情報) へのアクセス  
URL: [https://x.com/PPDPO\\_Fukuoka](https://x.com/PPDPO_Fukuoka) または右QRコード②



<予想される向こう1か月の天候 (令和6年7月29日~8月26日) >

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、特に期間前半はかなり高くなる見込みです。向こう1か月の降水量はほぼ平年並、日照時間は平年並か多い見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間 (数値は予想される出現確率)

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並10 高80% 平年より高い見込み	少40 並30 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% 平年並か多い見込み

(福岡管区気象台 令和6年7月25日発表1か月予報より抜粋)

## 【普通作物：水稲】

### 1 いもち病 (葉いもち)

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

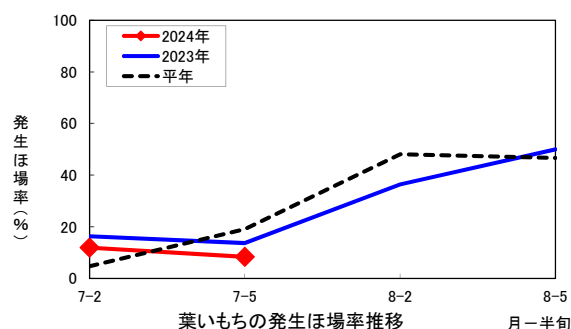
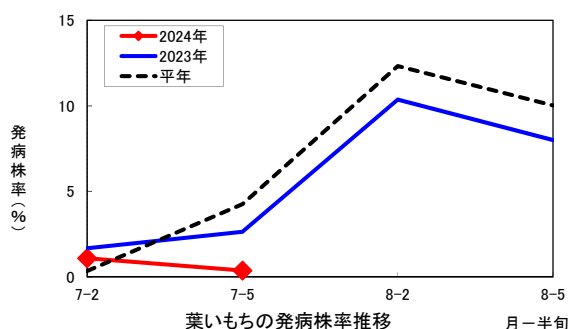
#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった (一~土)。

発病株率 0.4% (平年 4.3%、前年 2.6%)

発生ほ場率 8.3% (平年 19.1%、前年 13.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている (一~土)。



#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況は地域・品種・ほ場等で大きく異なるため、必ずほ場の状況を確認する。

イ 本病は、病斑が少なくても大量の胞子を飛散するので、発生ほ場では穂いもち抑制のため薬剤防除を徹底する。また、多発ほ場では穂肥を控える。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除は、出穂前の予防散布を基本とする。

エ 薬剤感受性低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 農薬の使用および散布等にあたっては、p16の内容を確認の上、適切に実施する (以下の病害虫についても同様)。

## 2 紋枯病

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果は、発病株率が0.042%、発生ほ場率が2.1%であった。

(令和6年度から7月5半旬調査を開始したため、平年、前年の数値はない)

イ 向こう1か月の気象予報では、並の条件となっている(±)。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 病斑が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

イ 出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。

## 3 セジロウンカ

### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

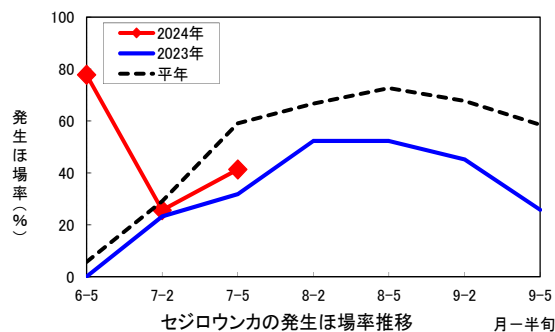
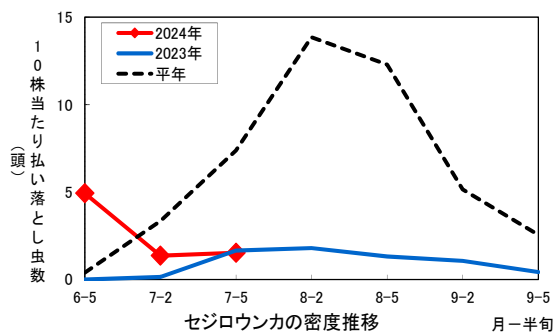
### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー~±)。

10株当たり払い落とし成幼虫数 1.5頭(平年 7.4頭、前年 1.7頭)

発生ほ場率 41.3%(平年 59.0%、前年 31.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



### (3) 防除上注意すべき事項

ア 使用した育苗箱施薬剤の種類によって発生量に差を生じる可能性があるため、ほ場における発生状況を確認する。

イ 幼穂形成期~穂揃期に吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少などの被害が生じるため、幼虫の発生が多い場合は薬剤防除を実施する。

## 4 トビイロウンカ

### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

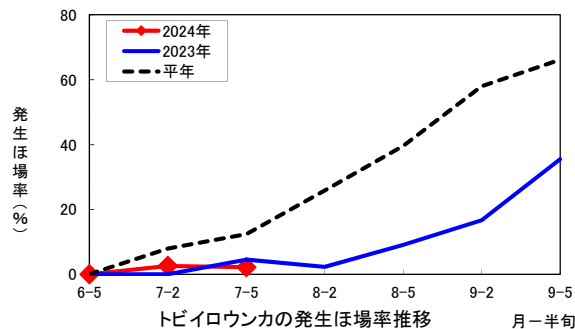
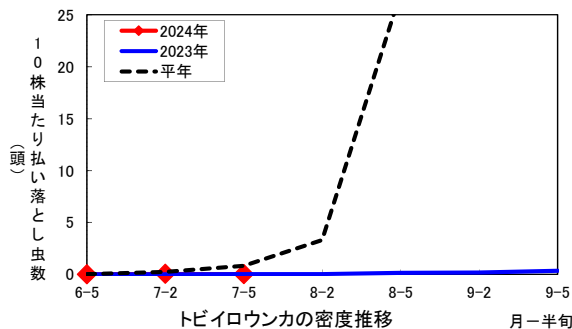
### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー~±)。

10株当たり払い落とし成幼虫数 0.009頭(平年 0.018頭、前年 0.818頭)

発生ほ場率 2.2%(平年 12.4%、前年 4.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 地域や移植時期により、飛来時期・飛来量は異なる。また、使用した育苗箱施薬剤の種類によって発生量に差を生じる可能性がある。そのため、必ずほ場における発生状況を確認する。なお、移植後1か月以上経過した場合、育苗箱施薬剤が施用された水稻でも増殖しやすい。
- イ 本種は8月以降急激に増加する。防除適期は若齢幼虫期で、病虫害防除所ホームページ (<https://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/>) の発生予想パターン図を参考に薬剤防除を行う。なお、パターン図は随時更新する。
- ウ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤は株元に十分かかるよう丁寧に散布する。
- エ 無人航空機による防除を気温が高い時間帯に実施すると、水稻の株元に到達する前に気化し、防除効果が低下する場合があるので、できる限り気温が上昇する前の早朝に実施する。

<b>※福岡県の要防除水準（中老齢幼虫合計値で示す）</b>	
飛来後第1世代：100株当たり	20頭以上
飛来後第2世代：100株当たり	100頭以上

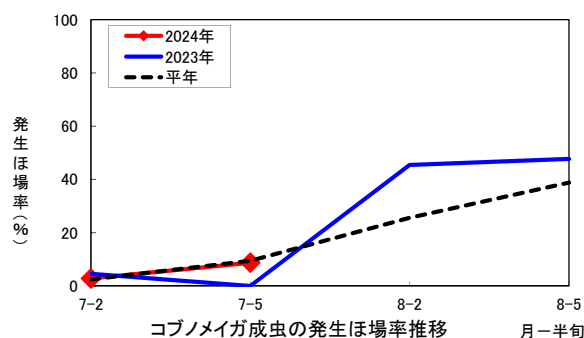
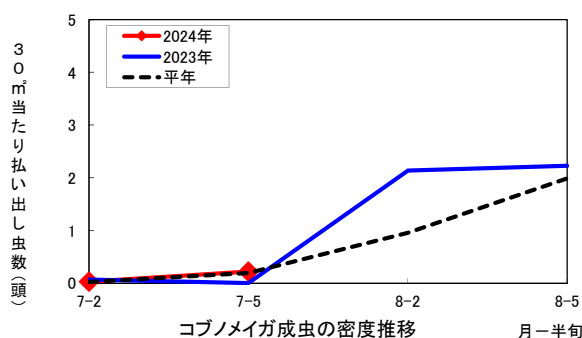
## 5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。  
食害株率 1.3% (平年 1.5%、前年 6.1%)  
食害株発生ほ場率 26.1% (平年 14.5%、前年 40.9%)  
30㎡当たり払出し成虫数 0.2頭 (平年 0.2頭、前年 0.0頭)
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期は発蛾最盛期から1週間後である。
- イ ほ場での発生が多い場合は、発生状況や病虫害防除所ホームページの発生予想パターン図を参考に薬剤散布を行う。

## 【普通作物：大豆】

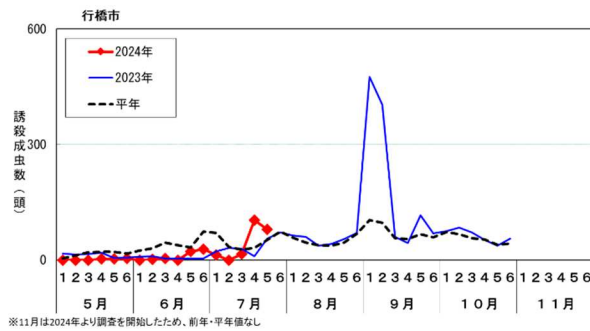
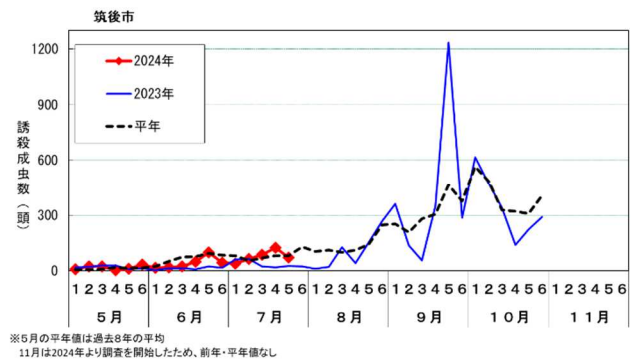
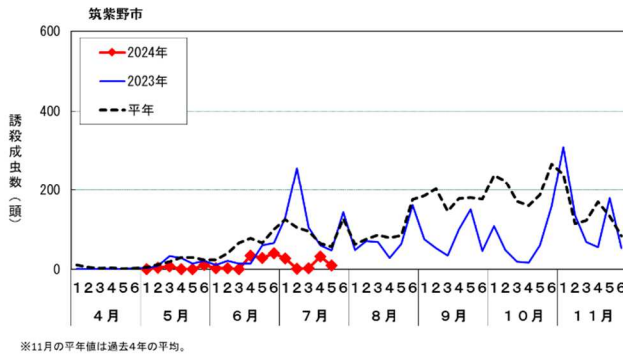
### 1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月1～5半月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、地域差はあるものの平年並であった(±)。  
筑紫野市 73頭 (平年 447頭、前年 600頭)  
筑後市 384頭 (平年 365頭、前年 189頭)  
行橋市 213頭 (平年 217頭、前年 151頭)
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。
- ウ 7月5半月調査において、一部のほ場で、白変葉の発生を確認している。



### フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺成虫数

#### (3) 防除上注意すべき事項

- ア フェロモントラップの誘殺数が急増したら、ほ場のハスモンヨトウや白変葉の発生状況を観察して防除の要否を決定する。
- イ 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去するとともに、白変葉の発生が多い場合は、薬剤散布を行う。
- ウ 食害による減収量が大きいのは開花期7～20日頃（8月下旬～9月上旬）であるので、この時期の防除が重要である。この時期に白変葉が多い場合は直ちに防除を行う。

### 【果樹：かんきつ】

#### 1 黒点病

##### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

##### (2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

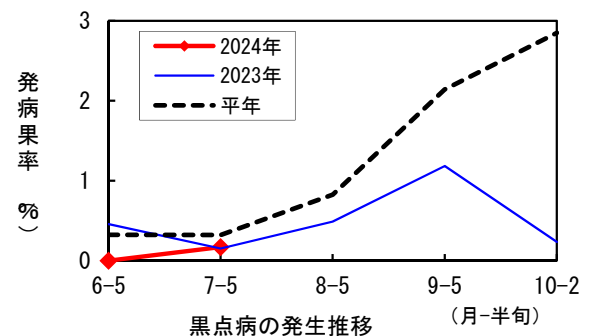
発病果率 0.15% (平年 0.32%、前年 0.15%)

発病ほ場率 18.2% (平年 31.2%、前年 18.2%)

- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

##### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。
- イ 前回防除後の積算降水量や散布間隔に応じた適期防除を行う。



## 2 ミカンハダニ

### (1) 予報の内容

発生量： 平年・前年より多

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生葉率 22.3% (平年 10.0%、前年 1.1%)

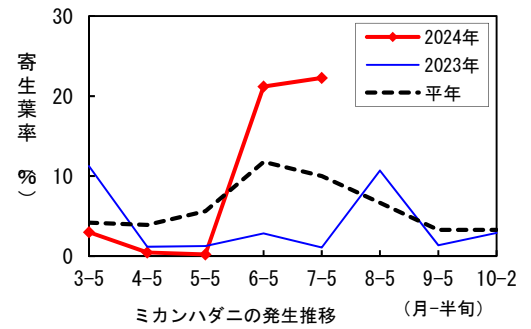
発生ほ場率 45.5% (平年 53.9%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【果樹：なし】

### 1 黒星病

#### (1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや多、前年よりやや少

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 5.3% (平年 3.3%、前年 10.3%)

発病ほ場率 90.9% (平年 66.4%、前年 90.9%)

発病果率 0.3% (平年 2.0%、前年 2.2%)

発病果ほ場率 54.5% (平年 56.0%、前年 90.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

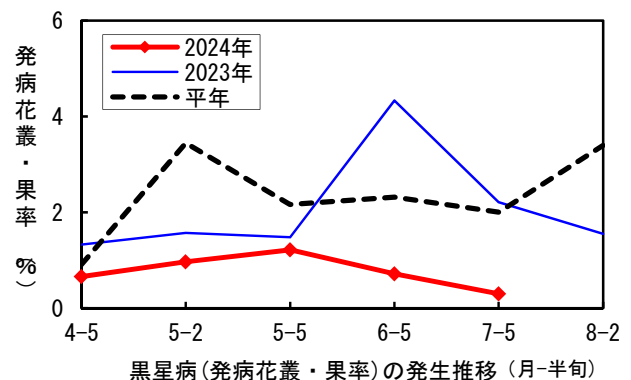
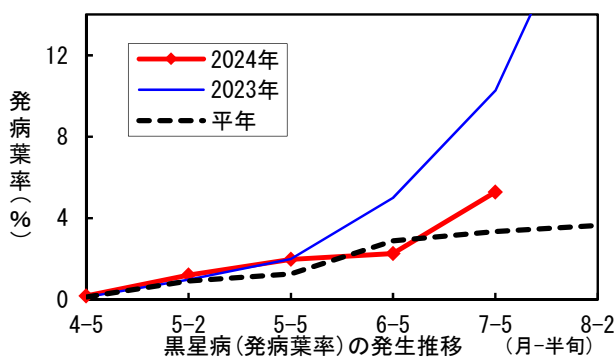
#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤防除の際は収穫前日数に注意して薬剤を選択する。

ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI 剤、QoI 剤、SDHI 剤、AP (アニルピリジン) 剤は同一系統剤の使用回数を年間で2回以内にとどめる。

エ 収穫後の秋から冬の管理として、落葉やせん定枝は適切に処分する。また密植気味の園は間伐や枝落として通風や採光を促し、排水不良園は改良を図る。



## 2 ナシヒメシンクイ

### (1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害果率 0.18% (平年 0.14%、前年 0.18%)

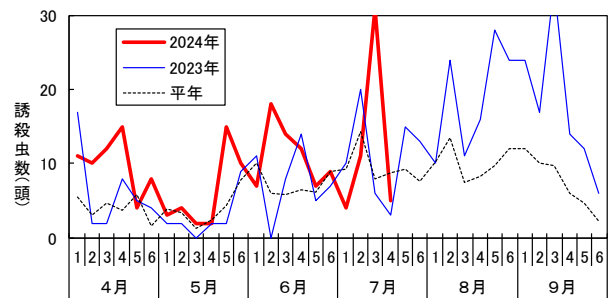
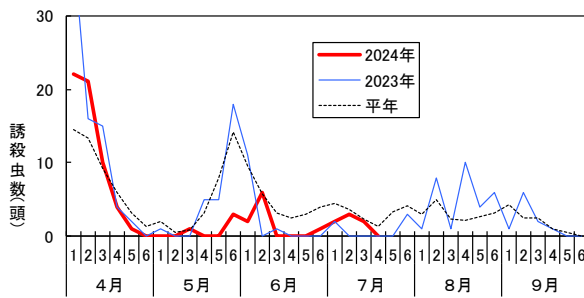
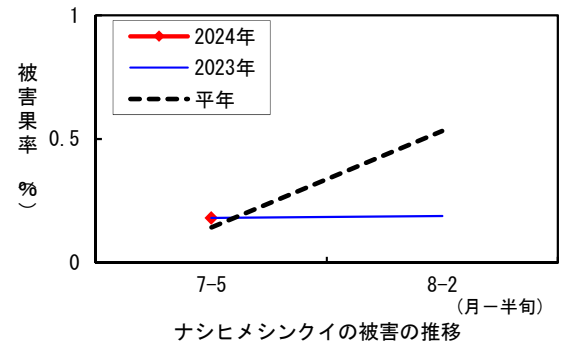
発生ほ場率 36.4% (平年 16.1%、前年 27.3%)

イ 第2～3世代と考えられる6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップにおける雄成虫誘殺数は、平年並であった(±)。

<朝倉市> 16頭 (平年 39.9頭、前年 14頭)

<八女市> 118頭 (平年 79頭、前年 84頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。



フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺虫数

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 8月以降の第4世代発蛾最盛期直後の若齢幼虫期を目安に防除を行う。

また、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除に当たっては果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

## 3 ハダニ類

### (1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや多、前年より多

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

寄生葉率 7.4% (平年 5.0%、前年 0.8%)

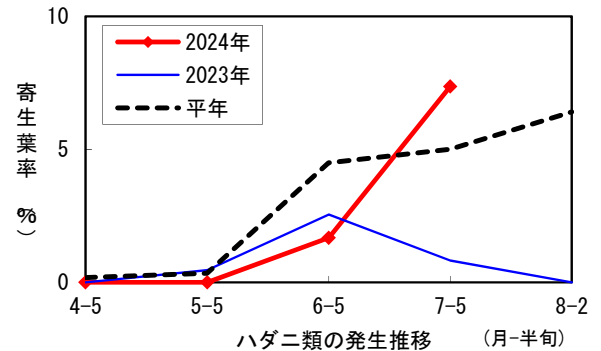
発生ほ場率45.5% (平年 40.8%、前年 27.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に防除を徹底する。

また、薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。





## 【果樹：かき】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

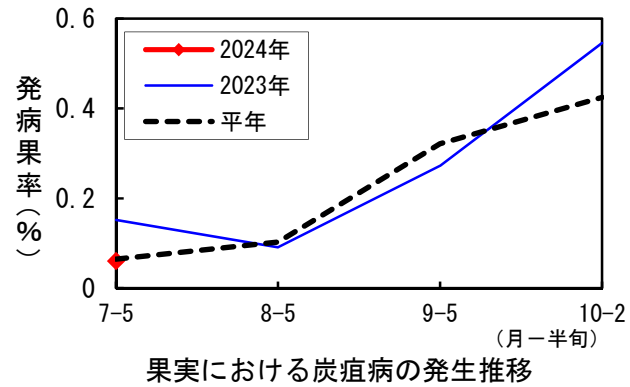
発病果率 0.06% (平年 0.06%、前年 0.15%)

発病果ほ場率 9.1% (平年 10.0%、前年 36.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



果実における炭疽病の発生推移

### 2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量： 平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生果率 0.7% (平年 4.8%、前年 1.3%)

発生ほ場率45.5% (平年 76.2%、前年 63.6%)

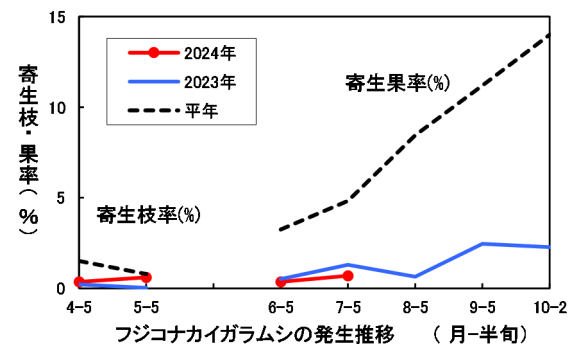
イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、天敵への影響が比較的少ない薬剤を選択する。

イ 果樹カメムシ類の防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

ウ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



フジコナカイガラムシの発生推移 (月-半旬)

### 3 ハマキムシ類 (チャノコカクモンハマキ、チャハマキ)

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

被害果率0.8% (平年 0.4%、前年 1.5%)

発生ほ場率72.7% (平年 37.0%、前年 72.7%)

イ 第1~2世代と考えられる6月1半旬~7月5半旬のフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、下記のとおり地域差が大きい。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 257頭 (平年 327頭、前年 371頭)

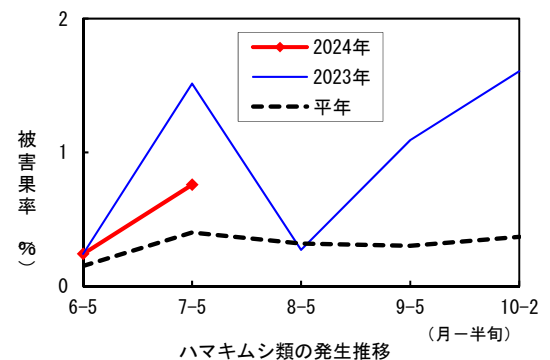
<八女市> 1,265頭 (※平年 743頭、前年 802頭)

：チャハマキ <うきは市> 0頭 (平年 7頭、前年 6頭)

<八女市> 16頭 (※平年 53頭、前年 12頭)

※八女市のフェロモントラップ設置箇所が2024年度から、6km程離れた場所に変更されたため、前年値・平年値との比較については参考値となる。

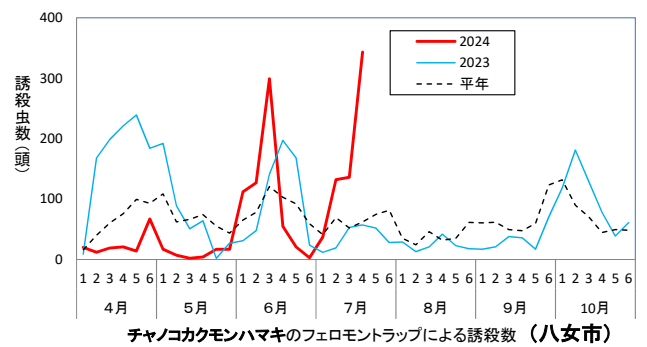
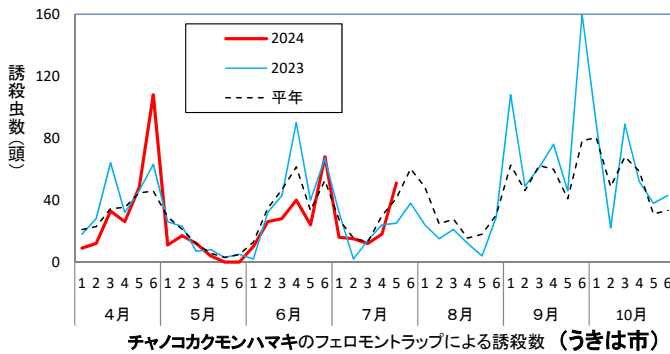
ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)



ハマキムシ類の発生推移 (月-半旬)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハマキムシ類は世代数が多く発生期間が長いので、各態の虫が混発している。発生が多い園では成虫の発生時期と量に注意し、発蛾最盛期7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を徹底する。
- イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



4 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生果率 0.06% (平年 0.13%、前年 0%)

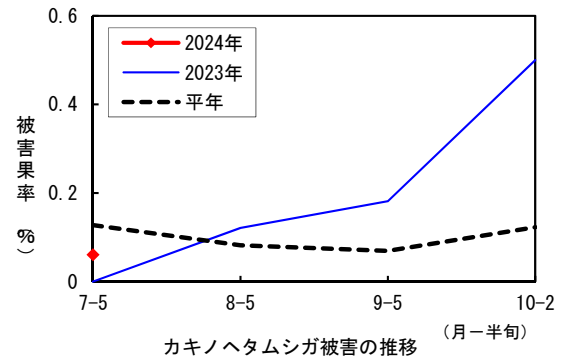
発生ほ場率 18.2% (平年 7.7%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上～中旬の第1世代成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の10日後頃の防除を実施する。

イ 孵化後の幼虫は果梗部やへたの部分から果実に食入するため、散布むらがないよう丁寧に散布する。



【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ他）】

(1) 予報の内容

発生量： 前年より多

発生時期： ヒノキ球果口針鞘数からの予察では、8月下旬以降の飛来が予測される。

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、ナシ及びカキでの被害果は平年よりやや多かった。

ナシ 被害果率 0.6% (平年0.3% 前年 0.1%)

発生ほ場率 81.8% (平年23.5% 前年 27.3%)

カキ 被害果率 0.2% (平年0.4% 前年 0.1%)

発生ほ場率 41.5% (平年21.8% 前年 18.3%)

イ 4月1半旬～7月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は、前年及び、越冬量が多くヒノキ球果結実数が少なかった2020年と比較して多かった。

誘殺数 <宗像市> 785頭 (前年 5頭、2020年 37頭)

<筑紫野市> 9,904頭 (前年 762頭、2020年 5,187頭)

<うきは市> 1,544頭 (前年 129頭、2020年 374頭)

ウ 7月5半旬のヒノキ球果ビーティングによる成幼虫捕獲虫数は前年よりやや多く、2020年よりやや少なかった。

捕獲虫数 4.4 頭 (前年 2.3 頭、2020年 8.3 頭)

エ 7月5半旬の14地点のヒノキ1球果当たりの平均口針鞘数と、離脱時期予測は下記のとおり。

県下平均：4.6本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月27日頃

朝倉地域：4.5本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月26日頃

久留米地域：5.9本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月24日頃

筑後地域：6.3本/果 ⇒ 離脱時期予測は8月21日頃

県北地域：2.8本/果 ⇒ 離脱時期予測は9月1日頃

※詳細は、令和6年度病害虫発生予察技術情報第6号（果樹カメムシ類）を参照。

オ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹園への飛来時期は地域により異なる。また、同一園内でも被害発生状況には偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ この予測は2024年7月5半旬時点でのデータに基づくものなので、今後の発生状況については病害虫防除所ホームページ（<https://www.jpjn.ne.jp/fukuoka/>）を参照する。

## 【野菜：イチゴ（育苗期）】

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多であった（±～+）。

発病株率 0.13%（平年 0.04%、前年 0.04%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年多発したほ場では、特に下記の項目を遵守し、防除を徹底する。

イ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがある。ほ場内での発生状況に注意し、発病株や周辺株を速やかに持ち出し処分する。

ウ 育苗床の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空け通風を図る。

エ 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な肥培管理に努める。

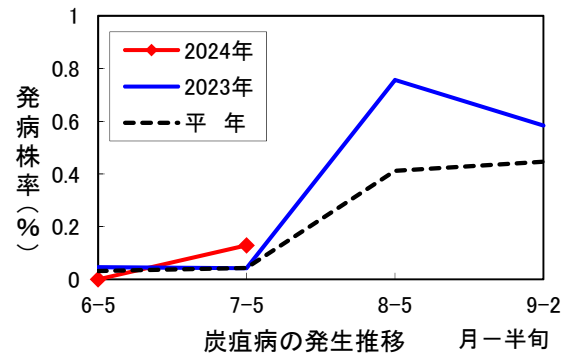
オ 発病後に治療できる薬剤はないことから、感染を防ぐため、葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を行う。

カ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

キ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に生育状況を確認し、健全苗を選抜する。

ク 入庫前や陽光処理時のかん水は過度にならないように注意する。

ケ 入庫する際は、加湿を避けるために苗を詰めすぎないように注意する。



### 2 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

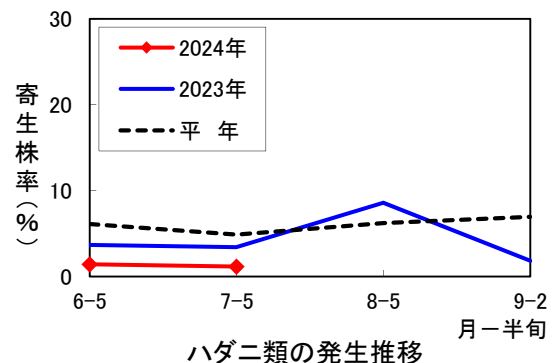
発生量：平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

寄生株率 1.14%（平年 4.9%、前年 3.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



### (3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- イ 多発後は防除が困難になるので、初発段階での防除に努める。
- ウ 寄生株は葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。
- エ 薬剤感受性が低下しやすいため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- オ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心掛ける。防除は摘葉後に行うと効果的である。
- カ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に必ず防除を行い、本ぼにハダニ類を持ち込まないようにする。
- キ 土着天敵を活用する場合は、天敵への影響が小さい薬剤を使用する。

<県ホームページ掲載の「令和6年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>

[https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/704227\\_61920224\\_misc.pdf](https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/704227_61920224_misc.pdf)

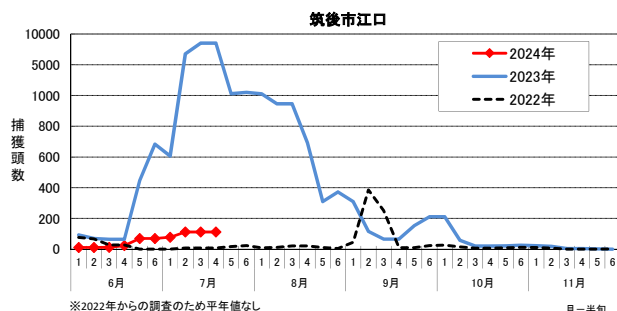
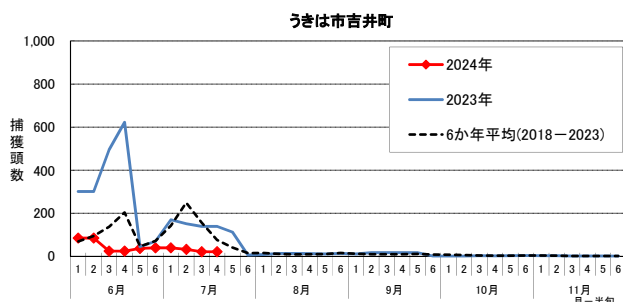
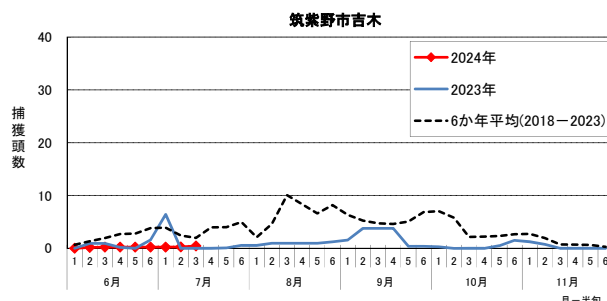
## 【野菜共通：コナジラミ類】

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

- ア 7月の粘着板トラップにおける捕獲虫数はやや少なかったが、一部で増加が見られる（-〜±）。
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±〜+）。



粘着トラップによるコナジラミ類の捕獲虫数

### (3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。
- ウ 黄色粘着板等の設置により発生状況を確認し、初発段階での防除に努める。
- エ 苗による持ち込みを防ぐため、育苗時から防除を行い、本ぼへの持ち込みを防ぐ。
- オ 「入れない、出さない、増やさない」対策を徹底する。

## 【茶】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった。(±~+)。

発病葉数 4.8 葉 (平年 1.6 葉、前年 5.7 葉)

発病ほ場率 88.9 % (平年 46.9%、前年 70.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

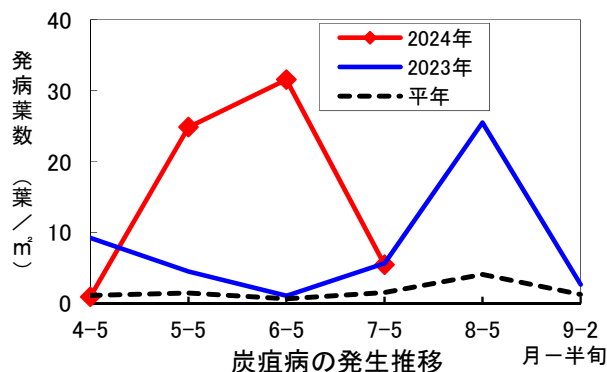
(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴により孢子が飛散伝搬するため、防除は降雨前日までに実施する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、秋芽萌芽期の防除を徹底する。

また、9月頃まで発生が増加するので、防除は降雨前日までに実施する。



### 2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

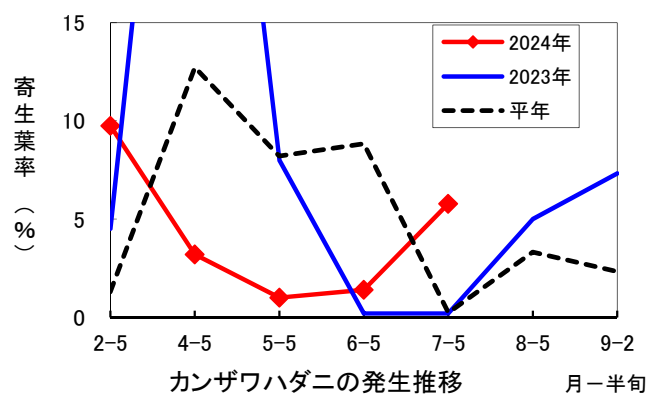
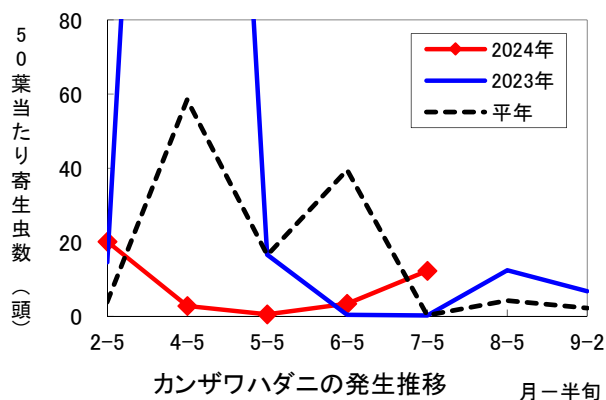
ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

50葉当たり虫数 11.0頭 (平年 0.3頭、前年 0.2頭)

寄生葉率 5.2% (平年 0.2%、前年 0%)

発生ほ場率 60% (平年 9.0%、前年 10%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)



(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発している園では、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

### 3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

1㎡当たり葉巻数 0.47葉(平年 0.25葉、前年 0.23葉)

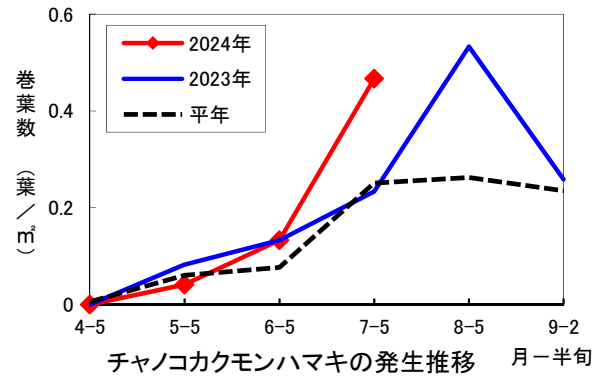
発生ほ場率 50.0%(平年 26.6%、前年 20.0%)

イ 4月1半旬~7月5半旬までのフェロモントラップによる雄成虫誘殺虫数は、うきは市では平年並であった(±)。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 257頭(平年 327頭、前年 371頭)  
<八女市> 1,265頭(※平年 743頭、前年 802頭)

※グラフはp9【果樹：カキ】の項参照

ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)



(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7~10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

### 4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

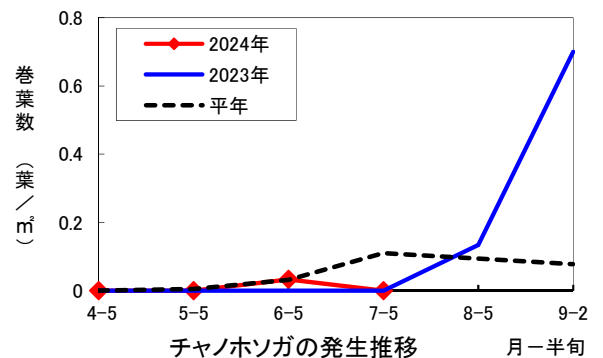
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

1㎡当たり葉巻数 0葉(平年 0.11葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(平年 34.4%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)



(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7~10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

### 5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

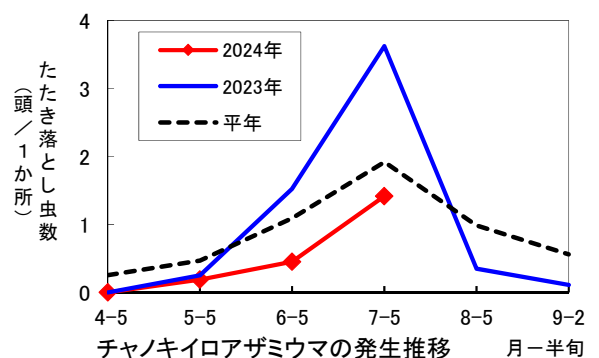
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

たたき落とし虫数 1.28頭(平年 1.92頭、前年 3.63頭)

発生ほ場率 80.0%(平年 70.9%、前年 60.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条



件となっている (+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア B 5 判板上の 10 回たたき落とし法で、10 頭以上見られる場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

## 6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7 月 5 半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった (-~±)。

たたき落とし虫数 0.18 頭(平年 0.73 頭、前年 0.23 頭)

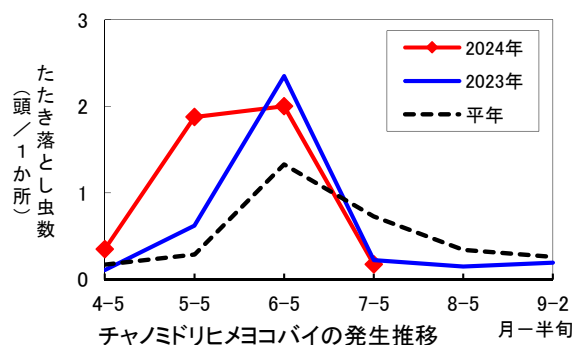
発生ほ場率 20.0 % (平年 63.1 %、前年 50.0 %)

イ 向こう 1 か月の気象予報では、多発生の条件となっている (+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 二番茶期から秋にかけて発生が多くなるため、成幼虫の発生状況に注意し、B 5 判板上の 10 回たたき落とし法で、4 頭以上見られる場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する



## 7 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7 月 5 半月調査の結果、発生量は平年並であった (±)。

寄生葉率 6.4 % (平年 8.2 %、前年 6.8 %)

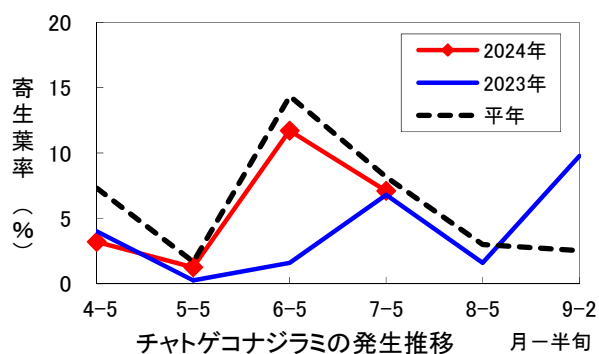
発生ほ場率 60.0 % (平年 52.4 %、前年 30.0 %)

イ 向こう 1 か月の気象予報では、多発生の条件となっている (+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャトゲコナジラミは年 3~4 回発生し、防除適期は成虫発生後の若齢幼虫発生期である。成虫が最も多い時から 14 日後を目安に防除を行う。

イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



## 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬を使用する機会が増える6月から8月を農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、「令和6年度 農薬安全使用運動」期間と定め、農薬の適正使用と危害防止について情報発信を実施する等、関係機関、団体と一体となって取り組みを強化しています。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

### 1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なる場合があるので、ラベルをよく確認する。

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

### 2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

### 3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

### 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

### 5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

### 6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。